

インタラクティブシステム論 第9回

梶本裕之
Twitter ID kajimoto
ハッシュタグ #ninshiki

日程

4/11 インTRODクシヨシ
4/18 フーリエ変換
4/25 フーリエ変換と線形システム
5/9 信号処理の基礎
5/16 (出張予定)
5/23 信号処理応用1(相関)
5/30 信号処理応用2(画像処理)
6/6 (出張予定)中間確認テスト
6/13 ラプラス変換
6/20 古典制御の基礎
6/27 行列
7/4 行列と最小二乗法
7/11 (出張予定)インタラクティブシステムの実際(小泉先生)
7/18 ロボティクス
7/25 (出張予定)期末確認テスト

行列

行列... 1, 2年でやったはず

今日の内容

- 固有値とは, 固有ベクトルとは
- 行列の対角化: なにをしたことになるか, なぜうれしいのか
- 情報理論・制御における行列の応用事例

キーワードは,
固有値, 固有ベクトル, 対角化

行列: データ列を変換するもの

$$\mathbf{y} = \mathbf{A}\mathbf{x} \quad \mathbf{x} = \mathbf{A}^{-1}\mathbf{y}$$

$$\begin{bmatrix} y_1 \\ y_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix}$$

(例1)

y: 観測データ, A: システムの性質, x: 媒介変数

(例2)

y: フーリエ空間での周波数成分, A: フーリエ変換行列,
x: 実空間でのデータ系列

(例) 2軸力センサ



(例)2軸力センサ

カセンサA レバー カセンサB

$$F_Z = x_A + x_B$$

$$F_X = k(x_A - x_B)$$

$$2 \times 1 \text{ベクトル} \begin{bmatrix} F_Z \\ F_X \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 1 \\ k & -k \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_A \\ x_B \end{bmatrix} \quad 2 \times 1 \text{ベクトル}$$

2x2行列

(例)多軸力センサ

Lever

Sensing Elements

$$F_Z = k_1(x_A + x_B + x_C + x_D)$$

$$F_X = k_2((x_A + x_B) - (x_C + x_D))$$

$$F_Y = k_3((x_A + x_C) - (x_B + x_D))$$

$$3 \begin{bmatrix} F_Z \\ F_X \\ F_Y \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} & & & & & \\ & & & & & \\ & & & & & \\ & & & & & \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_A \\ x_B \\ x_C \\ x_D \end{bmatrix} \quad 4$$

3x4行列

一般には正方行列ではない！！
(例)6軸力センサには8つ以上のセンサエレメント内蔵

カセンサのキャリブレーション(較正)

カセンサA レバー カセンサB

$$F_Z = k_1 x_A + k_2 x_B$$

$$F_X = k_3 x_A + k_4 x_B$$

$$\begin{bmatrix} F_Z \\ F_X \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} k_1 & k_2 \\ k_3 & k_4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_A \\ x_B \end{bmatrix}$$

k1~k4のパラメータは元々未知。
これを求めなければ使えない！！

逆行列

カセンサA レバー カセンサB

$$\begin{bmatrix} F_Z \\ F_X \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} k_1 & k_2 \\ k_3 & k_4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_A \\ x_B \end{bmatrix}$$

これを $\mathbf{f} = \mathbf{A}\mathbf{x}$ と書く。

ここで、
「ある力を加えたときの各センサ出力は？」
という逆の関係を考える。

$$\mathbf{x} = \mathbf{A}^{-1}\mathbf{f} = \mathbf{G}\mathbf{f} \quad \begin{bmatrix} x_A \\ x_B \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} g_1 & g_2 \\ g_3 & g_4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} F_Z \\ F_X \end{bmatrix}$$

逆行列の「測定」

カセンサA レバー カセンサB

$$\mathbf{x} = \mathbf{G}\mathbf{f} \quad \begin{bmatrix} x_A \\ x_B \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} g_1 & g_2 \\ g_3 & g_4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} F_Z \\ F_X \end{bmatrix}$$

(1) $F_Z=1, F_X=0$ の力を加え、各センサの出力を記録

$$\begin{bmatrix} x_A \\ x_B \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} g_1 & g_2 \\ g_3 & g_4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} g_1 \\ g_3 \end{bmatrix}$$

各センサの出力に、逆行列の成分g1, g3が現れる！

(2) $F_Z=0, F_X=1$ の力を加え、各センサの出力を記録

$$\begin{bmatrix} x_A \\ x_B \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} g_1 & g_2 \\ g_3 & g_4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} g_2 \\ g_4 \end{bmatrix}$$

各センサの出力に、逆行列の成分g2, g4が現れる！

逆行列の「測定」

カセンサA レバー カセンサB

$$\mathbf{x} = \mathbf{G}\mathbf{f} = \mathbf{A}^{-1}\mathbf{f} \quad \begin{bmatrix} x_A \\ x_B \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} g_1 & g_2 \\ g_3 & g_4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} F_Z \\ F_X \end{bmatrix}$$

$\mathbf{G}=\mathbf{A}^{-1}$ の成分, g1~g4が得られたので、その逆行列を計算すればAが得られる。

$$\mathbf{f} = \mathbf{A}\mathbf{x}$$

まとめると、

$$\begin{bmatrix} x_A \\ x_B \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} g_1 & g_2 \\ g_3 & g_4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} g_1 & g_2 \\ g_3 & g_4 \end{bmatrix}$$

行列に単位行列をかけたことに相当

単位力でなくて良い

$$\begin{bmatrix} g_1 & g_2 \\ g_3 & g_4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} f_{z1} \\ f_{z2} \\ f_{x1} \\ f_{x2} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} m_1 \\ m_2 \\ m_1 \\ m_2 \end{bmatrix}$$

1回目の入力 1回目の出力
2回目の入力 2回目の出力

$$GF = M$$

$$G = MF^{-1}$$

- 2回**既知**のカベトルを加えて、各センサの出力を得る
- カベトルを並べたものをカベ行列F、センサ出力を並べたものをカベ行列Mとする
- カベ行列の逆カベ行列F⁻¹をMにかければ、カベ行列Gが得られる。
- Gの逆カベ行列が望んだ「校正カベ行列」A

ほとんどすべてのカベ行列は、カベトルを「引き延ばす」ものである(1)

$$v = Au \quad \begin{bmatrix} v_x \\ v_y \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} t_{11} & t_{12} \\ t_{21} & t_{22} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_x \\ u_y \end{bmatrix}$$

A = $\begin{bmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 2 \end{bmatrix}$ の時、

$$\begin{bmatrix} v_x \\ v_y \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_x \\ u_y \end{bmatrix} =$$

(作用)xカベ成分を3倍、yカベ成分を2倍に引き延ばす

ほとんどすべてのカベ行列は、カベトルを「引き延ばす」ものである(1)

$$A = \begin{bmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 2 \end{bmatrix}$$

(作用)xカベ成分を3倍、yカベ成分を2倍に引き延ばす

ほとんどすべてのカベ行列は、カベトルを「引き延ばす」ものである(2)

$$A = \begin{bmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 2 \end{bmatrix}$$

は、xカベ成分を3倍、yカベ成分を2倍に引き延ばす

では、

$$A = \begin{bmatrix} 8 & -2 \\ 3 & 1 \end{bmatrix}$$

の時は何?... よく分からない。

試してみる

$$A = \begin{bmatrix} 8 & -2 \\ 3 & 1 \end{bmatrix}$$

で、平面上の点群はどうカベ移動するか

X=-3~3, Y=-3~3の点群で検証

```

Scilabコード
A=[8,-2;3,1];
s=[];
t=[];
for x=-3:3
    for y=-3:3
        r=A*[x;y];
        s=[s,r(1)]; //x座標格納
        t=[t,r(2)]; //y座標格納
    end
end
plot(s,t,'o');
    
```

試してみる

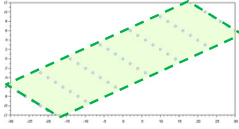
変換前

変換後

やはり何らかの「引き伸ばす」作用である

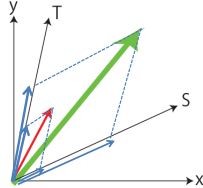
ほとんどすべての行列は、
ベクトルを「引き延ばす」ものである(2)

$A = \begin{bmatrix} 8 & -2 \\ 3 & 1 \end{bmatrix}$ の作用は



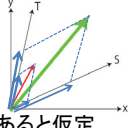
- 謎のS軸成分をs倍、
- 謎のT軸成分をt倍
に引き延ばすことである

ただしもはや、
このS,T軸は直交していない。



固有ベクトルと固有値 $A = \begin{bmatrix} 8 & -2 \\ 3 & 1 \end{bmatrix}$

固有ベクトル, 固有値とは,
謎のS, T軸, およびs,t倍
のことである。



(求める手続き)
(1) λ 倍されるだけで方向不変のベクトルがあると仮定

$$A\mathbf{u} = \lambda\mathbf{u}$$

(2) 式変形

$$A\mathbf{u} = \lambda\mathbf{u} = \lambda I\mathbf{u} \quad \begin{bmatrix} 8-\lambda & -2 \\ 3 & 1-\lambda \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_x \\ u_y \end{bmatrix} = 0$$

$$(A - \lambda I)\mathbf{u} = 0$$

固有ベクトルと固有値 $\begin{bmatrix} 8-\lambda & -2 \\ 3 & 1-\lambda \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_x \\ u_y \end{bmatrix} = 0$

$$\begin{bmatrix} a-\lambda & b \\ c & d-\lambda \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_x \\ u_y \end{bmatrix} = 0$$

$$(a-\lambda)u_x + bu_y = 0 \rightarrow u_y = -(a-\lambda)u_x / b$$

$$cu_x + (d-\lambda)u_y = 0$$

$$cu_x - (d-\lambda)(a-\lambda)u_x / b = 0$$

$$((a-\lambda)(d-\lambda) - bc)u_x = 0$$

$$\therefore (a-\lambda)(d-\lambda) - bc = 0$$

この解 λ_1, λ_2 を固有値と呼び、
対応するベクトルを固有ベクトルと呼ぶ。

固有ベクトルと固有値 $\begin{bmatrix} 8-\lambda & -2 \\ 3 & 1-\lambda \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_x \\ u_y \end{bmatrix} = 0$

$\lambda_1 = 2$ に対応する固有ベクトルは

$$\begin{bmatrix} 8-2 & -2 \\ 3 & 1-2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_x \\ u_y \end{bmatrix} = 0$$

大きさを1とすれば, $k = 1/\sqrt{10}$

$\lambda_2 = 7$ に対応する固有ベクトルは

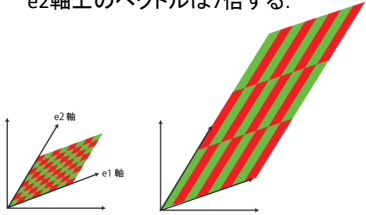
$$\begin{bmatrix} 8-7 & -2 \\ 3 & 1-7 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_x \\ u_y \end{bmatrix} = 0$$

大きさを1とすれば, $k = 1/\sqrt{5}$

作用: e1軸上のベクトルは2倍,
e2軸上のベクトルは7倍する。

固有ベクトルと固有値 $A = \begin{bmatrix} 8 & -2 \\ 3 & 1 \end{bmatrix}$

作用: e1軸上のベクトルは2倍,
e2軸上のベクトルは7倍する。

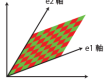


- やはり引き延ばす作用である
- 固有ベクトル上のベクトルは, 固有値倍される

行列と座標変換

- 引き延ばす作用である
- 固有ベクトル上のベクトルは, 固有値倍される

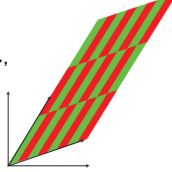
わかりにくい...



行列の作用を,

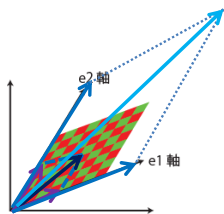
- (1) 引き延ばし軸での成分表示に変換し,
- (2) 各成分を引き延ばし,
- (3) 合成して元に戻す

ように分解すればわかりやすいはず??



まとめと

行列Tの作用は次の3段階に分解できる。
 (1) 引き延ばし軸での成分表示に変換し、
 (2) 各成分を引き延ばし、
 (3) 合成して元に戻す



(3) 合成して元に戻す操作, から考える

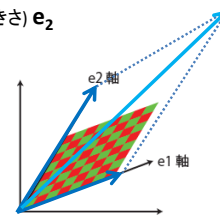
行列の作用を,
 (1) 引き延ばし軸での成分表示に変換し、
 (2) 各成分を引き延ばし、
 (3) 合成して元に戻す

この操作は単なるベクトルの足し算にすぎない
 (e_1 成分の大きさ) $e_1 +$ (e_2 成分の大きさ) e_2

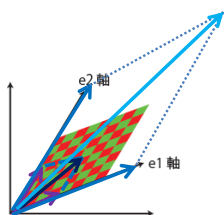
$$= [e_1 \ e_2] \begin{bmatrix} e_1 \text{軸成分} \\ e_2 \text{軸成分} \end{bmatrix}$$

$$P = [e_1 \ e_2] \text{ において}$$

$$= P \begin{bmatrix} e_1 \text{軸成分} \\ e_2 \text{軸成分} \end{bmatrix}$$



行列Tの作用は次の3段階に分解できる。
 (1) 引き延ばし軸での成分表示に変換し、
 (2) 各成分を引き延ばし、
 (3) 合成して元に戻す

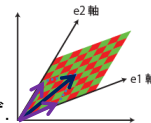


(1) 引き延ばし軸での成分表示

行列の作用を,
 (1) 引き延ばし軸での成分表示に変換し、
 (2) 各成分を引き延ばし、
 (3) 合成して元に戻す

(3)「合成」が,

$$P \begin{bmatrix} e_1 \text{軸成分} \\ e_2 \text{軸成分} \end{bmatrix}$$

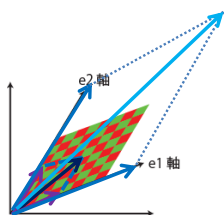


で出来るのだから, (1)はその逆のはず。
すなわち

$$P^{-1} \begin{bmatrix} x \text{軸成分} \\ y \text{軸成分} \end{bmatrix}$$

により引き延ばし軸での成分表示ができる

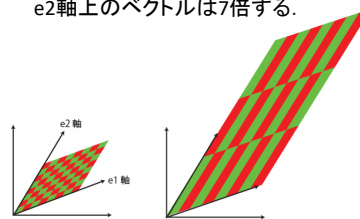
行列Tの作用は次の3段階に分解できる。
 (1) 引き延ばし軸での成分表示に変換し、
 (2) 各成分を引き延ばし、
 (3) 合成して元に戻す



固有ベクトルと固有値(再)

$$A = \begin{bmatrix} 8 & -2 \\ 3 & 1 \end{bmatrix}$$

作用: e_1 軸上のベクトルは2倍,
 e_2 軸上のベクトルは7倍する。



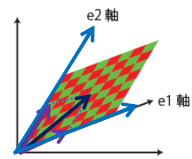
- やはり引き延ばす作用である
- 固有ベクトル上のベクトルが, 固有値倍される

(2) 引き延ばし軸での引き延ばし

行列の作用を、
 (1) 引き延ばし軸での成分表示に変換し、
 (2) 各成分を引き延ばし、
 (3) 合成して元に戻す

各成分を
 固有ベクトル e_1 軸に沿って固有値 λ_1 倍、
 固有ベクトル e_2 軸に沿って固有値 λ_2 倍する。

この操作は、



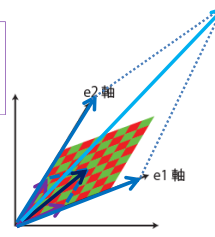
$$\begin{bmatrix} e_1 \text{軸成分を } \lambda_1 \text{倍} \\ e_2 \text{軸成分を } \lambda_2 \text{倍} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \lambda_1 & 0 \\ 0 & \lambda_2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} e_1 \text{軸成分} \\ e_2 \text{軸成分} \end{bmatrix}$$

まとめると

行列 T の作用は次の3段階に分解できる。
 (1) 引き延ばし軸での成分表示に変換し、
 (2) 各成分を引き延ばし、
 (3) 合成して元に戻す

$$Ax = P \begin{bmatrix} \lambda_1 & 0 \\ 0 & \lambda_2 \end{bmatrix} P^{-1}x$$

固有値を対角成分に並べた行列を T と置く。 $T = \begin{bmatrix} \lambda_1 & 0 \\ 0 & \lambda_2 \end{bmatrix}$

$$Ax =$$


行列の対角化を数式で導出

行列の対角化を数式で導出する。
 まず、2つの固有値を λ_1, λ_2 、固有ベクトルを e_1, e_2 とする。

2つの式を「まとめて」書くと次のようになる。

[e_1, e_2] を P 、固有値を対角成分に持つ行列を T と書き、左辺の P を右辺に移項すると

(こちらのほうが簡単！
 この式が持つ意味は前述のとおり)

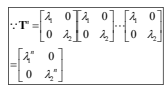
レポート課題(1)

$$A = \begin{bmatrix} 3 & -3 \\ 1 & 7 \end{bmatrix}$$

の作用について、 xy 平面上の点群 ($X=-3 \sim 3, Y=-3 \sim 3$) がどのように移動するか、例と同様に試してみることにしよう。

またこの移動が、固有ベクトル、固有値の観点から妥当であることを確認すること

重要な応用: A^n

$$\begin{aligned} A^n x &= (PTP^{-1})^n x \\ &= P \underbrace{TP^{-1}PTP^{-1}PTP^{-1} \dots PTP^{-1}}_n x \\ &= P T^n P^{-1} x \\ &= P \begin{bmatrix} \lambda_1^n & 0 \\ 0 & \lambda_2^n \end{bmatrix} P^{-1} x \end{aligned}$$


行列の n 乗を簡単に計算することができる

重要な結論: n が非常に大きくなった時の A^n

$$A^n x = P \begin{bmatrix} \lambda_1^n & 0 \\ 0 & \lambda_2^n \end{bmatrix} P^{-1} x$$

行列の固有値 λ の絶対値が引き延ばしの倍率だから、
 固有値が

- 一つでも1より大きければ、 A^n は発散する
- 全て1より小さければ、 A^n は0に収束する

例: A^n $A = \begin{bmatrix} 8 & -2 \\ 3 & 1 \end{bmatrix}$

$$A^2 = \begin{bmatrix} 8 & -2 \\ 3 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 8 & -2 \\ 3 & 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 58 & -18 \\ 27 & -5 \end{bmatrix}$$

$$A^3 = \begin{bmatrix} 8 & -2 \\ 3 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 8 & -2 \\ 3 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 8 & -2 \\ 3 & 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 58 & -18 \\ 27 & -5 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 8 & -2 \\ 3 & 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 410 & -134 \\ 201 & -59 \end{bmatrix}$$

$P = \begin{bmatrix} 1/\sqrt{10} & 2/\sqrt{5} \\ 3/\sqrt{10} & 1/\sqrt{5} \end{bmatrix}$ $\lambda_1 = 2$ $\lambda_2 = 7$ を代入して、

$$A^3 = P T^3 P^{-1} = \begin{bmatrix} 1/\sqrt{10} & 2/\sqrt{5} \\ 3/\sqrt{10} & 1/\sqrt{5} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 2^3 & 0 \\ 0 & 7^3 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1/\sqrt{10} & 2/\sqrt{5} \\ 3/\sqrt{10} & 1/\sqrt{5} \end{bmatrix}^{-1}$$

$$= \dots = \begin{bmatrix} 410 & -134 \\ 201 & -59 \end{bmatrix} \quad \text{固有値が大きいのでどんどん大きくなる}$$

ほとんどすべての行列は、ベクトルを「引き延ばす」ものである(3)

$$A = \begin{bmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{bmatrix} \quad \text{の時は?} \dots \text{回転と習ったはず}$$

以前と同様に固有値と固有ベクトルを求めてみる。

$$\begin{bmatrix} \cos \theta - \lambda & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta - \lambda \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_x \\ u_y \end{bmatrix} = 0$$

$$(a - \lambda)(d - \lambda) - bc = 0$$

$$(\cos \theta - \lambda)(\cos \theta - \lambda) + \sin^2 \theta = 0$$

回転行列の固有値 = $\exp(j\theta)$

$$(\cos \theta - \lambda)(\cos \theta - \lambda) + \sin^2 \theta = 0$$

$$\cos^2 \theta - 2\lambda \cos \theta + \lambda^2 + \sin^2 \theta = 0$$

$$\lambda^2 - 2\lambda \cos \theta + 1 = 0$$

$$\lambda = \frac{2\cos \theta \pm \sqrt{4\cos^2 \theta - 4}}{2}$$

$$= \frac{2\cos \theta \pm j\sqrt{4\sin^2 \theta}}{2}$$

$$= \cos \theta \pm j \sin \theta$$

$$= \exp(\pm j\theta)$$

回転行列の固有ベクトル

$\cos \theta + j \sin \theta$ に対応する固有ベクトルは

$$\begin{bmatrix} \cos \theta - \lambda & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta - \lambda \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_x \\ u_y \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \cos \theta - \cos \theta - j \sin \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta - \cos \theta - j \sin \theta \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_x \\ u_y \end{bmatrix}$$

$$= \sin \theta \begin{bmatrix} -j & -1 \\ 1 & -j \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_x \\ u_y \end{bmatrix} = 0$$

$\therefore u_x = j u_y \quad e_1 = k \begin{bmatrix} j \\ 1 \end{bmatrix}$ **大きさを1とすれば例えば, $k = 1/\sqrt{2}$**

$\cos \theta - j \sin \theta$ に対応する固有ベクトルは

$$e_2 = k \begin{bmatrix} 1 \\ j \end{bmatrix} \quad \text{大きさを1とすれば例えば, } k = 1/\sqrt{2}$$

(参考)

回転行列も(拡張された)引き延ばしである

- 一般の行列は、固有値、固有ベクトル共に複素数。
- x,y軸に加えて、複素軸も含めた4次元空間中でこれまでと同様の引き延ばしを行う演算とみなせる。
- 複素固有値の絶対値が引き延ばし倍率、偏角が回転角度を表す。

情報理論における行列の例

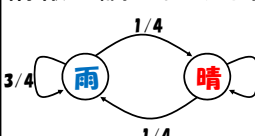
- ある日晴れた: 次の日も晴れる確率は3/4, 雨になる確率は1/4
- ある日雨: 次の日も雨の確率は3/4, 晴れる確率は1/4

これは「状態遷移図」によって表せる。(マルコフ過程と呼ぶ)

• ある日晴れた⇒次の次の日も晴れる確率は?

(回答)
次の日晴れて、次の次の日晴れる
次の日雨になって、次の次の日晴れる
合わせて、
では、次の次の次の日だと? 100日後だと?

情報理論における行列の例



| | | | |
|-------|-----------|-----|-----|
| | X_{t-1} | 晴 | 雨 |
| X_t | 晴 | 3/4 | 1/4 |
| | 雨 | 1/4 | 3/4 |

状態遷移図を行列で表すことで、ある日の天気の状態分布(x_{t-1})から次の日の天気の状態分布(x_t)を得ることができる。

次の日の天気の状態分布ベクトル $\begin{bmatrix} p_0 \\ p_1 \end{bmatrix}$ = 遷移確率行列 $\begin{pmatrix} 3/4 & 1/4 \\ 1/4 & 3/4 \end{pmatrix}$ ある日の天気の状態分布ベクトル $\begin{bmatrix} p_0 \\ p_1 \end{bmatrix}$

情報理論における行列の例

ある日晴れた: 確率分布ベクトルは $[1, 0]$ なので、次の日は、

$$\begin{bmatrix} P_{晴} \\ P_{雨} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \\ \end{bmatrix}$$

その次の日は、

$$\begin{bmatrix} P_{晴} \\ P_{雨} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \\ \end{bmatrix}$$

一般にN日後は、

$$\begin{bmatrix} P_{晴} \\ P_{雨} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \\ \end{bmatrix}$$

100日後は? 無限日後は?

A^N を求める.

$$A^n x = P \begin{bmatrix} \lambda_1^n & 0 \\ 0 & \lambda_2^n \end{bmatrix} P^{-1} x$$

$$\begin{bmatrix} 3/4 - \lambda & 1/4 \\ 1/4 & 3/4 - \lambda \end{bmatrix} = 0$$

A^N を求める.

$$A^n x = P \begin{bmatrix} \lambda_1^n & 0 \\ 0 & \lambda_2^n \end{bmatrix} P^{-1} x$$

$$=$$

$$=$$

これによって、n日後の晴れと雨の確率分布をもとめられる

無限日後に起きること

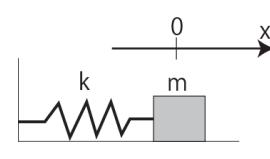
$$\lim_{n \rightarrow \infty} \begin{bmatrix} 1^n & 0 \\ 0 & 1/2^n \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1/2 \end{bmatrix} \text{より}$$

初日の、晴れの確率と雨の確率の合計値は明らかに1だから、

つまり、この遷移行列に従う場合、初日の天気に関わらず無限日後は晴れと雨の確率は等しくなる。

制御における行列

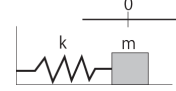
おもりの挙動をシミュレートしたい



```

m=1.0; //重さ
k=1.0; //ばね定数
x=1.0; //初期位置
v=0; //初期速度
dt=0.1; //時間刻み
record=[]; //記録用
for time= 0:dt:10 //時刻
    F=-k*x; //ばねによって生じる力
    a=F/m; //生じる加速度
    v=v+a*dt; //速度
    x=x+v*dt; //位置
    record=[record,x]; //記録(*テクニック:ベクトルが伸びていく)
end
plot([0:dt:10],record);
    
```


制御における行列



```

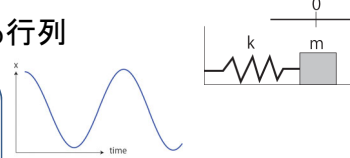
for time= 0:dt:10 //時刻
    F=-k*x; //ばねによって生じる力
    a=F/m; //生じる加速度
    v=v+a*dt; //速度
    x=x+v*dt; //位置
end
    
```

位置, 速度, 加速度を並べた「状態ベクトル」 \mathbf{x} を定義 $\mathbf{x} = \begin{bmatrix} x \\ v \\ a \end{bmatrix}$

上の関係から, dt時間後の新たな位置, 速度, 加速度は

$$\begin{bmatrix} x_n \\ v_n \\ a_n \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} x_{n-1} \\ v_{n-1} \\ a_{n-1} \end{bmatrix} = \mathbf{A}\mathbf{x}$$

制御における行列



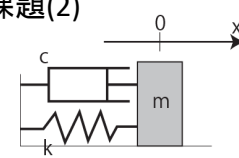
```

Scilabコード
m=1.0; //重さ
k=1.0; //ばね定数
x=1.0; //初期位置
v=0; //初期速度
a=k/m*x; //初期加速度
dt=0.01; //時間刻み
record=[]; //記録用
state=[x;v;a];
A=[1,dt,0,0,1,dt;-k/m,0,0];
for time= 0:dt:10 //時刻
    state=A*state;
    record=[record,state(1)];
end
plot([0:dt:10],record);
    
```

$$\begin{bmatrix} x_n \\ v_n \\ a_n \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & dt & 0 \\ 0 & 1 & dt \\ -k/m & 0 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_{n-1} \\ v_{n-1} \\ a_{n-1} \end{bmatrix} = \mathbf{A}\mathbf{x}_{n-1} = \dots = \mathbf{A}^n \mathbf{x}_0$$

- 行列Aのn乗を使えば, n時刻先の状態をシミュレート可能
- 行列Aの固有値を見れば, システムが将来(n=∞)収束するか発散するか予測可能!

レポート課題(2)



- ダンパを加えた際の行列を考え, 同様のシミュレーションプログラムを書け
- 行列Aの固有値の絶対値が1よりも小さいこと, すなわち位置が収束することを確認し, コメントに記せ (Scilabでは固有値はspec()で求められる)

注意: ここで導入した行列はあくまで導入編用で, シミュレーションとしては不正確です.